

目覚めると、隣には誰もいなかった。

(夢だったのだろうか……)

寝起きのぼんやりとした頭で、ジークフリード・キルヒアイスは昨晩のできごとを順番に思い返してみた。

明日は三ヶ月ばかりかかる辺境視察に向かう、その出発が早いので、と夕食の席でラインハルトとアンネローゼに出立の挨拶を述べた。ふたりとも、いつもと変わらず、自分の無事を祈る言葉を贈ってくれた。

ラインハルトはちよつとぶつぎらぼうに「早く帰ってこいよ」(自分で決めたくせに、キルヒアイスが自分から離れることがちよつと不満なのだ)と。アンネローゼは「旅路に気をつけて。無事の帰りを待っています」と。

そして、自分の寝室に引き取った、その夜更けのことだった。小さなノックにキルヒアイスが扉を開けると、思いがけない人が立っていた。

「……アンネローゼさま」

しかもその思いがけない人は、思いがけない姿だった。

黄金色の髪は解き流されたまま、黒いガウンの下に、白い夜着一枚。それもごく薄いものだから、下のなめらかな素肌が透けて見える。

皇帝陛下すら虜にした絶世の美女に、こんな姿をされては、は

つきりいつて目の毒である。ドレス姿などより百倍も。

その衝撃に棒立ちになったキルヒアイスは、アンネローゼはこうだった。

「入っていただけるかしら」

「あ、は、はい」

キルヒアイスはあわてて、アンネローゼを中に通した。こんなところを誰かに見とめられてはとんでもないことになる。

(いったい、何事だ?)

そう思いながらも、まずは話を聞こうと良識的なことを考えながら振り向いた彼に、アンネローゼはさらに予想外の行動に出た。するりと肩からガウンを落とすと、そのまま彼に抱きついたのだ。

「あ、あの、アンネローゼさま」

そしてあまりのことに声をうわずらせる彼に、こうささやいたのだった。

「わたしを、抱いて」

キルヒアイスの頭は真っ白になった。

パニック状態になった頭の隅で、かろうじて残った理性が絶叫している。

(ち、ちよつと待つて下さいアンネローゼさま、抱いてっつて抱いてっつてどういふことですか、いったいながあつたんですかどう

したんですかなんでこういうことになってるんですか)

メガトン級レーザー水爆なみの衝撃波がおさまったところで、
ようやくその絶叫が聞こえた彼は、なんとか舌を動かしてその一端を言語化しようと試みた。

「あ、あの、アンネローゼさま」

「だめ？」

(いやだめとかだめじゃないとかそんなことではなくて、そのあのいったいこれはどういうことなのかとわたしはそのあの)

だがその瞬間、アンネローゼが顔を上げた。サファイア色の濡れた瞳がまっすぐに彼を見つめた。

その表情に、キルヒアイスははっとした。

それは、あのときの表情だった。

(弟はもう、あなたと同じ学校へは行けないの。短い間だったけど、ありがとう)

そう告げて、小さかった彼にチョコレートケーキをくれたときの表情と。

望まずして皇帝の後宮に納められたときの。

「アンネローゼさま」

その発見に絶句した彼に、アンネローゼはその顔を伏せてささやいた。

「ジーク、お願い」

そのささやきは、キルヒアイスの理性の絶叫を吹き飛ばすには十分だった。

もとより、こんな状況で、崇拜する美しい女神の「お願い」に

耐えられる二十三歳の健康な成人男子など、百万人に一人もいるわけはなかったのである。

そして、いまはなるようになった翌朝である。

いつもと変わらない自分の寢室の天井に、いつもと変わらない朝である。起床時間が早いのは、辺境視察への出発のため。

(あれは、夢だったのだろうか……)

ぼうぜんとしながらも、記憶と視線をめぐらせて、サイドテールにまで至ったとき、キルヒアイスは跳ね起きた。

サイドテールの上には、白いハンカチーフ。繊細なレースで縁取られ、隅に文字が刺繍されている。

A

(夢じゃない！)

跳ね起きてよく見れば、自分は何も着ていない。当然の結果である。

事態を認識したキルヒアイスの顔から、次第に血の気が引き始めた。

「ど、どうしよう……」

そのまま彼は、ベッドの上で頭を抱え込んでしまった。